

実践報告

看護学初期学習者の高齢者理解のための 教育的方略の検討

Strategy of nursing education for beginners to facilitate suitable
understanding of elderly persons

加藤 真由美, 青木 萩子

Mayumi Kato, Hagiko Aoki

新潟大学医学部保健学科

School of Health sciences, Faculty of Medicine, Niigata University

キーワード

看護学初期学習者, 高齢者理解, 教育的方略, 高齢者イメージ, リハビリテーション看護

はじめに

より正確な対象理解は看護の質に関わることであり、看護学を学ぶ上で重要な学習課題の1つである。しかし、看護学生は高齢者に対して、「知恵をもつ」といったポジティブイメージをもっている反面、「がんこ」、「不健康」といったネガティブイメージを多数もっていることが報告¹⁻³⁾されている。誤ったイメージもしくは、ステレオタイプとよばれる固定したイメージをもつことは、対象理解のバリアとなる。看護学生が高齢者の個別性を見極める看護実践能力を築くことは勿論のこと、人として尊重した対象理解ができる能力を身に付けることは重要である。

看護学生もしくは医学生を対象とした高齢者への意識改善のための教育には、できるだけ実際の高齢者理解につなげるため模擬体験を授業に取り入れる⁴⁻⁶⁾、省察を実施する⁷⁾、高齢者の生活過程の理解を深めるため「老年に関する映画」を教材化し視聴する⁸⁾などが試行されている。兎澤ら³⁾は、高齢者理解のためのレクチャー、模擬体験、高齢者施設見学の複数のつらなった教育を行うことにより、看護学生の高齢者イメージを

「思考の連鎖により、身体的側面から健康観的側面へと学びの範囲を拡大できる」と述べている。

教育的効果からは、根底に高齢者に誤ったイメージがある状態で、もしくはあることに気付かないで実習に臨んだ場合、対象への接近が早期から適切にできず、個別性のある看護にたどりつくことが遅れることが懸念される。すなわち、看護学学習初期段階から高齢者理解への教育的方略が必要であると考え。そこには、学生の意識改善を押しつけるのではなく、学習の主体者である学生の主体的な学びと継続した自己フィードバックの積み重ねを通して行うことが、より効果を上げると考える。

今回は、看護学初期学習者である2年次生を対象に開講している老年リハビリテーション看護論(選択科目)において、高齢者のリハビリテーションを推進するための看護や看護師の役割を的確に考察できる能力の素地形成を教育目標に、高齢者理解を授業基盤においた主体的学習の教育的方略の評価を行うことを目的とした。

資料1 老年リハビリテーション看護論の授業概要

回目	授 業 概 要
第1回目	授業オリエンテーション, 省察課題, ビデオの視聴 (「車椅子から立ち上がり-脳卒中のリハビリ革命」NHK2002年放送)
第2回目	高齢者リハビリテーション・高齢者リハビリテーション看護とは (概念, 高齢者の現状, 高齢者のリハビリテーションを阻害すること, 制度・サービスなど)
第3回目	高齢者の尊厳と高齢者の尊厳・QOLを低め廃用症候群の引き金となる虐待・身体拘束について (クラスディスカッション含む)
第4回目	高齢者のQOLを低め, 廃用症候群の引き金となる転倒・転落について (移動障害のある高齢者の杖歩行・移乗動作のビデオを鑑賞後にクラスディスカッション)
第5回目	人生の統合 (ライフストーリーの活用など), エンパワメント (事例提示), 認知面のリハビリテーションとしてリアリティオリエンテーションや回想法の場面の朗読 (クラスディスカッション含む)
第6回目	生活支援面のリハビリテーション看護, 自助具, 生活環境, 他 (機器操作の学習など)
第7回目	グループ課題: 制度・サービス, 介護予防, 心理面, 日常生活の支援, 事故予防, 尊厳の保障, 施設での生活, 地域での生活の8つの視点から選択し, 「高齢者リハビリテーションを支えるための看護師の役割を考える」発表の資料作成・発表準備
第8回目	グループ発表会で学生が示したテーマ: ①「老々介護を行う上で新潟市の制度・サービスの現状は?」②「介護予防」, ③「高齢者の心理」, ④「認知障害を有する高齢者の日常生活支援」, ⑤「島田さんの転倒予防」, ⑥「尊厳の保障-高齢者の虐待予防」, ⑦「ユニットケアとその重要性」, ⑧「自立した(架空)生活を送るための住環境-リフォームせずに, 100円からの簡単便利な快適生活-」

研究方法

1. 対象

対象は、4年生大学における2年次生の看護学生のうち、老年リハビリテーション看護論1単位(選択科目)の履修者76名であり、最終的には研究協力に同意書を提出した70名(92.1%)であった。

2. 方法

授業目標は、“看護学生は、高齢者のもてる力を引き出すこと、生活の質(quality of life, QOL)の向上、それを低下させる廃用症候群の予防などについてリハビリテーション看護学の視点を学び、高齢者ケアおよび看護師の役割を考えられる”であった。授業回数は8回であり、概要は資料1の通りであった。

対象理解に対する教育的方略とは、①学生に高齢者に対する省察を行ってもらい、②リハビリテーション過程にある高齢者のビデオをみてもらい、③それぞれの授業テーマに応じて、できるだけ当事者の思いを語った手記や現状に関する資料を朗読したり、高齢者の移乗・移動場面の動画をみてもらい、それについてクラスでディスカッションを実施、④グループ発表は仮想事例を展開したテーマを挙げてよいとした。省察については、省察を体験した医学生の97%が、省察がより高齢者理解の助けになり、ケアを行う上でポジティブな効果があった⁷⁾と報告している。学生には省察として、自己の高齢者に対する考えやイメージをありのままに振り返ってもらい、その内容に対

する是非は全く問わず、省察を行う過程で生じる変化を尊重した。高齢者のビデオ鑑賞については、看護学生の高齢者理解の学習資源として活用でき、「老人力」の理解⁸⁾になり得るため導入した。手記や動画の活用は、高齢者と関わりの少ない学生が、できるだけ具体的かつ全人的に高齢者理解ができることを目的に導入した。クラスディスカッションを行ったことは、学生が手記や動画をとおして感じたことを共有することにより、理解の広さや深まりを期待したためであった。仮想事例を挙げてのグループ発表は、看護師として関心をもって対象に接近すること、および抽象的に高齢者や高齢者のおかれている現状を理解するのではなく、できるだけ当事者である高齢者理解を踏まえて考察してもらったためであった。

3. データ収集・分析

1) データ収集

データは、学生が記載した課題・感想文を活用した。学生には授業開始時において、a) 高齢者像として、自分の高齢者に対するイメージ(どう捉えているか)について決め付けや否定的イメージと思われること、b) 決め付けや否定的イメージと思われること以外のイメージ、c) 高齢者リハビリテーション看護の視点から、自分の決め付けや否定的イメージを高齢者理解に変えるにはどうしたらいいのか、何が必要かを記載してもらった。最終授業のグループ発表終了後には、d) 発表を含む授業全体を通して、高齢者に対するイメージや考えに変化はありましたか? 変わらない・

少し変わった・とても変わったから最も近いと思われるものを選択してもらい、いずれの場合でもその理由を記述してもらった、e) 高齢者のリハビリテーション看護を推進するために看護や看護師に求められることを記載してもらった。

2) 分析方法

分析は学生が記述した課題・感想用紙の内容を意味が失わない単位で抽出し、それらを意味の類似性と相違性の点から検討して分類しサブカテゴリとし、さらにサブカテゴリを分類してカテゴリ化した。研究者は分析のそれぞれの過程において何度も意味単位、サブカテゴリ、カテゴリを読み返し、解釈や類似性・相違性に違和感がないか研究者間で確認した。

4. 倫理的配慮

学生には、研究協力に関する負担を十分に考慮した上で、以下のとおりの倫理的手順をつくり、研究協力の依頼をした。まず、研究協力の強制力の排除のため、学生には研究協力と授業とはまったく異なる位置付けにあることを説明し、説明の時間は授業時間外に行った。説明内容は研究目的、方法、協力はまったく任意であること、協力拒否の権利と拒否してもまったく成績に影響しないこと、予測されるリスク、倫理的配慮についてであり、説明書を用いて口頭で研究依頼を行った後、同意書を配布した。同意書の回収は、1週間の回収期間を設け、固定式の鍵のかかるボックスに入れてもらった。研究者が当該科目責任者であったため、提出者が特定できないよう、科目担当者および研究者以外の教員が回収し、同意書を提出した学生の課題・感想文を振り分け、それをコピー機にかけ、氏名・学籍番号がない状態にして研究者に手渡した。予測されるリスクとしては、データ漏洩の可能性であり、データは鍵のかかる所に保管し、研究終了後はデータを廃棄する、研究で知りえた情報は秘密厳守する、研究以外でデータを使用しないなどを留意した。

なお、授業で活用した高齢者の動画は、看護学生への教育教材の目的のみで使用することを約束し、高齢者およびその家族から書面による同意を得て撮影したものである。

結 果

カテゴリは〈 〉、サブカテゴリは《 》、意味単位は「 」で示す。

1. 高齢者への決め付けや否定イメージ(表1)

このカテゴリは、〈機能・能力障害がある〉〈脆

弱である〉〈汚い〉〈双方向に意味の通じたコミュニケーションをとることが難しい〉〈希望がなく孤立している〉〈考え方や価値観が古い〉〈不活発な単調な生活をしている〉〈周囲の人や経済に負担となっている〉などであった。〈機能・能力障害がある〉のサブカテゴリの《障害による生活の依存》には、「介護が必要で、小さい子供に戻ったみたいに他人の手が必要」などがあり、〈双方向に意味の通じたコミュニケーションをとることが難しい〉の《話が通じにくい》には「何回も言わないと分からない」、《話が理解しにくい》には「話が聞き取りにくい」、《同じ話が多く、話が長い》には「話が要領を得ず長くなる」、《会話はあがるが一方方向》には「人の話は聞かないで自分の話をしたがる」といったものがあつた。〈希望がなく孤立している〉の《希望や気力がもてないでいる》には、「リハビリを『もう良くならない』と思っている」、〈不活発な単調な生活をしている〉の《活動量・範囲が狭い》には「動くことが億劫で家に引きこもりがち」が含まれていた。

2. 決め付けや否定的以外のイメージ(表2)

決め付けや否定的以外のイメージのカテゴリは、〈長年の人生から蓄積して発展させた長所がある〉〈親しみやすい〉〈周囲に迷惑をかけないように気遣いをしている〉〈次世代を育成している〉〈老後を楽しんでいる〉〈可愛らしい〉〈健康管理をし、元気である〉であった。〈長年の人生から蓄積して発展させた長所がある〉の《人生経験から知識や知恵がある》では、「多くの壁におつかり、四苦八苦しなから生きたことによる知恵があることを祖母の話で分かった」などが含まれていた。〈次世代を育成している〉の《若年者に教えてくれる》では「伝統を次の世代に伝える努力をしている」や《若年者を見守ってくれる》では「次世代の幸せを願い、温かく見守っている存在」であった。なお、2名の学生にはこの欄の記載が全くなかった。

3. 否定的イメージを理解に変えるために必要なこと(省察を通して)(表3)

理解に変えるために必要なことのカテゴリは、〈高齢者の実際を知る〉〈コミュニケーションを互いに取り合い理解する〉〈高齢者の状態・状況を推察して理解する〉〈若い人が高齢者を知る機会をつくる〉〈若い人が意識のもち方をかえる〉や〈できるだけ自立を促進する〉〈ポジティブなイメージにする〉〈介護負担・負担感を減らす〉があつた。〈高齢者の実際を知る〉のサブカテゴリは、

表1 高齢者に対する決め付けや否定的イメージと思われること

カテゴリ	サブカテゴリ
機能・能力障害がある	障害による生活の依存 運動能力の低下 知覚機能の低下 体力の低下 食事動作能力の低下 認知機能の低下
脆弱である	病気や怪我になりやすく重症化しやすい 病気や苦痛がある 先が短い
汚い	外見の変貌 排泄にかかわる汚ないイメージ 臭いがする
双方向に意味の通じたコミュニケーションをとることが難しい	同じ話が多く、話が長い 話が理解しにくい 高齢者は発話が難しい 話が通じにくい 聴覚障害のためコミュニケーションがとりにくい テンポよく会話できない 会話はあがるが一方方向 聞きたくない話をする
希望がなく孤立している	孤立している 希望や気力がもてないでいる 不安に思い生活している
いやな性格	頑固 わがまま 怒りっぽい しつこい
考え方や価値観が古い	若年者に対する否定 もったいながる 無理をする 考え方が古い
不活発な単調な生活をしている	活動量・範囲が狭い 毎日ほぼ同じ生活をしている
周囲の人や経済に負担となっている	コミュニケーションをとることが負担である 依存により家族や他者に負担をかけている 若年者に経済的な負担をかけている

《加齢や高齢者に関して知識を得る》《高齢者の実際の生活や環境を知る》《高齢者の考えや意識を知る》《個人を知る》《先入観をもたないで知るようにする》《その人にとっての意味を理解する》《理由をきいて理解する》があった。《高齢者の実際の生活や環境を知る》では、「実際に話をしたり、一緒に作業をして生活様式や出来ること、出来ないことを理解する」や「街にいる高齢者や日常生活の様子などを見ることで身体的特徴や行動を理解したらよい」が含まれていた。《できるだけ自立を促進する》では、《できることを見つけて自分でしてもらおう》《環境を変えてできるだけ自分でしてもらおう》などがあった。ここでは、《高齢者の実際を知る》など学生の高齢者を知ろうとする姿勢と、《できるだけ自立を促進する》など

高齢者自身がポジティブイメージに変化することの関わりの側面がみられた。

4. イメージの変化とその内容

最終の授業後では、高齢者のイメージが“とても変わった”15名(21.4%)、“少し変わった”49名(70.0%)、“変わらなかった”6名(8.6%)であり、9割以上は変化していた。

変わった理由の内容(表4)は、“とても変わった”では、《高齢者をポジティブに捉えられるようになった》であり、《高齢者の問題を身近に考えられるようになった》《高齢者ケアをポジティブに捉えられるようになった》《制度や援助のメリット・デメリットが分かった》などであった。“少し変わった”では、《イメージではなく高齢者の実際が分かった》《高齢者をより広い視点

表2 高齢者に対する決め付けや否定的イメージを除くイメージ

カテゴリ	サブカテゴリ
長年の人生から蓄積して発展させた長所がある	人生経験から知識や知恵がある 信念をもっている 特技がある 慣わしを守る 地域社会と密着している
親しみやすい	やさしい 話をしてくれる
周囲に迷惑をかけないよう気遣いしている	がまんする 常識がある
次世代を育成している	若年者に教えてくれる 若年者を見守ってくれる
老後を楽しんでいる	楽しみをもっている 楽しむ余裕がある 活動的である 前向き
可愛らしい	動作が可愛らしい 体格が可愛らしい
健康管理をし、元気である	元気がある 自分で健康管理をしている

表3 高齢者への否定的イメージを理解に変えるために必要なこと（省察を通して）

カテゴリ	サブカテゴリ
高齢者の実際を知る	加齢や高齢者に関して知識を得る 高齢者の実際の生活や環境を知る 高齢者の考えや意識を知る 個人を知る 先入観をもたないで知るようにする その人にとっての意味を理解する 理由をきいて理解する
コミュニケーションを互いに取り合い理解する	相互に理解し合う 決め付けないで歩み寄る 実際に聞いて一緒に考える
高齢者の状態・状況を推察して理解する	高齢者体験をして理解する 高齢者の状態・状況を推察して理解する 自分が高齢者になったときのことに置き換えて理解する
若い人が高齢者を知る機会をつくる	高齢者に活躍してもらう場を設け接する機会をつくる 若い人が高齢者と直接触れ合える場を提供する 高齢者について学ぶ機会をつくる
若い人が意識のもち方をかえる	人生の先輩として敬う 尊敬をもってかかわる意識をもつ 高齢者に考えがあつての行動と理解する意識をもつ 理解できない考え方や行動は加齢によるものと理解する意識をもつ 理解できない考え方や行動に対しては違う視点で考える意識をもつ 自分に置き換えて考える 先入観をもたない 高齢者に関心をもつ
できるだけ自立を促進する	できることを見つけて自分でしてもらう 環境を改善しできるだけ自分でしてもらう 寝たきりを予防する 機能低下や病気を予防する
ポジティブなイメージにする	脆弱なイメージを払拭する 生きがいをつくる 臭いの予防
介護負担・負担感を減らす	実質的な介護負担を減らす 理解により介護負担感を減らす

表4 イメージが変化した理由

	カテゴリ	サブカテゴリ
とても変わった	高齢者をポジティブに捉えられるようになった	高齢者の問題を身近に考えられるようになった 高齢者や加齢をポジティブな面でも捉えられるようになった 高齢者の尊厳が大切と分かった 加齢による影響を理解できるようになった 高齢者ケアをポジティブに捉えられるようになった 制度や援助のメリット・デメリットが分かった
少し変わった	イメージではなく高齢者の実際が分かった	実際を知ることにより高齢者を身近に感じるようになった ほんやりとしていたことがはっきりと分かった 高齢者の行動を理解できるようになった 頑固というより弱い立場であると分かった 高齢者には高齢者なりの考えがあると思うようになった 高齢者の尊厳が阻害されていることが分かった 感覚として分かるようになった
	高齢者をより広い視点で理解できるようになった	高齢者をさまざまな視点でみれるようになった 身体だけでなく、心理面へのケアも大切と分かった 高齢者や加齢をポジティブな面でも捉えられるようになった 高齢者ケアをさまざまな視点で理解することができた
	高齢者の本当の思いが分かった	依存ではなく、自立したい思いがあることが分かった 高齢者は介護を受けることを望んでいないことが分かった 障害をもちたくてもったわけではないことが分かった 高齢者にも個性があることが分かった 予想以上に高齢者には悩みや問題があることが分かった
	高齢者に強みがあることが分かった	介入により自立を進められたり、良くなることが分かった 介護負担は軽減できることが分かった
変わらなかった	高齢者に対する自分の姿勢が変わった	コミュニケーションはこちらから知ろうとする態度や配慮することが必要と分かった 授業をとおして高齢者ケアに対して関心が上がった 自分の立場に置き換えて高齢者理解を考えることができた 高齢者の尊厳が大切と分かった 体験に活かした
	従来の捉えと変わらない	自分が思っていたとおりであった 予想できることであった 高齢者になりたくない思いは変わらない 特に高齢者という考えはない

で理解できるようになった)〈高齢者の本当の思いが分かった)〈高齢者に強みがあることが分かった)〈高齢者に対する自分の姿勢が変わった)であった。〈イメージではなく高齢者の実際が分かった)では、《実際を知ることにより高齢者を身近に感じるようになった》《頑固というより弱い立場にあることが分かった》などがあつた。〈高齢者の本当の思いが分かった)には《依存ではなく、自立したい思いがあることが分かった》《高齢者は介護を受けることを望んでいないことが分かった》《障害をもちたくてもったわけではないことが分かった》などがあつた。“変わらなかった”は、〈従来の捉えと変わらない)であり、《自分が思っていた通りであった》《高齢者になりたくない思いは変わらない》などであった。“とても変わった”と“少しかわつた”で共通でみられたサブカテゴリは、《高齢者や加齢をポジティブな面でも捉えられるようになった》《高齢者の尊

厳が大切と分かった》であった。

5. 高齢者のリハビリテーション看護を推進するために看護や看護師に求められること(表5)

カテゴリは、〈高齢者ケアを直接的に提供する役割)〈心理面を支持する役割)〈連携の役割)〈仲介の役割)〈調整の役割)〈代弁の役割)〈制度・サービスの普及・充実の役割)〈家族指導の役割)〈尊厳を保障したケアを実践する役割)〈看護師としての態度役割)であった。〈高齢者ケアを直接的に提供する役割)の《ADL自立を維持・向上する》では、「日常生活全てに手を出すのではなく、補助具の紹介など自分で出来ることを目指すようにする」が含まれていた。〈尊厳を保障したケアを実践する役割)の《尊厳を尊重した援助を行う》では「患者にとって希望がもてる目標を立て、生活に苦痛をとまなわれないケアを行うことが看護」や「高齢者が主体的に生きられるようにする」であった。〈看護師としての態度役割)の《尊

表5 高齢者リハビリテーション看護を推進するために看護師に求められること

カテゴリ	サブカテゴリ
高齢者ケアを直接的に提供する役割	個別性のあるケアを行う 包括的に介入する 加齢に応じたケアを行う ADL自立を維持・向上するケアを行う 認知症者へは察して看護を行う
心理面を支持する役割	心理的にサポートする 心の負担を軽減する
連携の役割	他職種、施設、家族、企業などとの連携 職種内で連携 他職種への提案
仲介の役割	他の職種の橋渡しをする
調整の役割	さまざまな職種がかかわるためリーダー的存在になる
代弁の役割	高齢者・家族の声を聞き周囲に広げる 患者に情報提供
制度・サービスの普及・充実の役割	一般にリハビリや介護予防の知識を普及する 制度やサービスを整える
家族指導の役割	家族を巻き込み看護を行う
尊厳を保障したケアを実践する役割	尊厳を尊重した援助を行う 求めていると感じ取ろうとする姿勢をもつ 信頼関係を築く
看護師としての態度役割	尊厳を尊重した態度で接する アセスメント・ケア能力を身につける

厳を尊重した態度で接する》では「無理やりやらせるのではなく、意欲を引き出し、自分からリハビリする環境をつくっていく態度」や「一番大切なのは高齢者を理解して看護にあたること」などであった。

考 察

今回の結果から、授業前は〈機能・能力障害がある〉〈脆弱である〉〈汚い〉〈双方向に意味の通じたコミュニケーションをとることが難しい〉〈希望がなく孤立している〉〈いやな性格〉〈考え方や価値観が古い〉〈不活発な単調な生活をしている〉〈周囲の人や経済に負担となっている〉といった自己の体験やメディアなどを通じて視聴覚から得られた印象をイメージとして捉えていたが、授業終了時には9割の学生にポジティブな変化がみられた。すなわち、〈イメージではなく高齢者の実際が分かった〉、〈高齢者をより広い視点で理解できるようになった〉、〈高齢者の本当の思いが分かった〉、〈高齢者に強みがあることが分かった〉など、高齢者の実像に即して対象を理解する姿勢が表れており、単なるイメージから看護師として対象を捉える視点へと変化していた。また、高齢者リハビリテーション看護を推進するために看護師に求められることは何かの問いに、

〈高齢者ケアの直接的に提供する役割〉〈心理面を支持する役割〉〈連携の役割〉〈仲介の役割〉〈調整の役割〉〈代弁の役割〉といったリハビリテーション看護の柱となる役割⁹⁾に加え、〈尊厳を保障したケアを実践する役割〉がみられた。エイジズムは対象理解のみならず、ケア提供の質へも影響する^{7, 10)}。これらの学生の反応から、今回の方略は、エイジズムを払拭した対象の捉えおよび尊厳をもったケアを提供する基盤形成につながったと考えられた。

これらの変化や効果の背景には、授業が省察からはじまったことが自己の内に、高齢者に対するエイジズムもしくは誤った捉えをもっていることを意識する起点となり、看護の担い手として改善に向けた方向へと意識を進め、各授業で具体的に高齢者の思いや生活の事実を触れることにより学生の意識の中で反復しながら高齢者理解が作り変えられていったと考えられた。エイジズムとは、バトラーにより提唱されたこと¹¹⁾をパルモアは、「ある年齢集団に対する否定的もしくは肯定的偏見または差別」であると定義¹²⁾している。市川¹³⁾が行った18歳から25歳を対象にした高齢者へのイメージ調査では、「いろいろなことをおしえてくれる」「やさしい」イメージを8割程度がもっていたが、「がんこ」「病気がち」のイメー

ジを7割、その他「手間がかかる」「くさい」といったネガティブイメージを多数もっていた¹³⁾。わが国では敬老を謳いながら、「根底には蔑視や無関心がある¹⁴⁾」という指摘がある。高齢者は一般的に脆弱で依存的であり、他の世代よりも社会的に価値が低いように思う社会規範があり、より若いうちからの意識改善の教育の必要性を提唱している¹⁵⁻¹⁶⁾。今回は2年次生に行っており、今後の高齢者看護の学習への基盤に寄与できると期待する。

さらに、エイジズムもしくは誤ったイメージを払拭できた理由には、授業内で高齢者の思いや現状を様々な視点からビデオや多数の資料などで示したことにより、学生の中で高齢者および高齢者の生活が“ありのまま”として受け止められたためと考えられた。エイジズムが生じる原因には、若年者である看護学生と高齢者のたいへん異なる社会背景における生活過程の違いによる価値観の相違や高齢者との交流不足による理解困難が挙げられる。個人差はあるものの、高齢者のたどってきた戦前・戦後の物の不足した社会背景で育まれた価値観と、高度成長後の発展した科学と産業の社会のもとで育てている看護学生とでは、相手への理解不足が生じることは否めない。加えて、核家族化と高齢者の施設入所化が進み、高齢者と接する機会が減少している社会状況から、援助につなげられるほどの適切なイメージや実際につながりにくい現状にあるといえる。65歳以上の高齢者が共に生活する3世代世帯は、昭和61年では44.8%であったが、平成10年から20%台に入り、平成20年では18.5%まで減少¹⁷⁾している。看護学生が高齢者と関わる機会は、3年次生の実習前において51%程度であり、35%はほとんど機会がないという報告¹⁸⁾がある。現に、3年次の老年看護学実習で実際に高齢者に関わることにより、高齢者イメージが変化したことが報告されている¹⁸⁾。今回の結果でも、イメージが変化した理由に、高齢者の実際や本当の思いが分かったなどがあり、核家族化が進み高齢者に実際に接したり、心の内をじっくりと聞くなどする機会が少なくなり、高齢者の思いや現状を知ることができないためと考えられた。

今回、〈双方向に意味の通じたコミュニケーションをとることが難しい〉があり、《話が通じにくい》《話が理解しにくい》《会話はあるが一方方向》がみられた。看護学生と高齢者の対話問題に“かかわりへの戸惑い”“かかわりへの懸念”“かかわ

りへの偏見”“かかわりの困難さ”があり、その背景にはエイジズムが影響していると報告¹⁹⁾がある。エイジズムの背景には文化的特徴がある¹⁴⁾とされているが、わが国では近年核家族化に加え、コンピューターゲームなど1人で楽しむ娯楽の普及、電子メールなど直接対面しなくとも容易にコミュニケーションがとれる媒体の発達、インターネットにより一方的に流れてくる大量の情報を十分に吟味することなく受け入れてしまう社会のめまぐるしい動態がこのようなエイジズムを引き起こしている可能性がある。全般的に高齢者との関わり以前の、若年者の双方向のコミュニケーション不足によるコミュニケーション能力の低下があるといえ、看護学生には直接対話によるコミュニケーションの楽しさや基本的コミュニケーション能力育成の強化が必要である。

最後に、高齢者リハビリテーション看護を推進するために看護師に求められることは何かの問いに、〈高齢者ケアを直接的に提供する役割〉〈心理面を支持する役割〉〈連携の役割〉〈仲介の役割〉〈調整の役割〉〈代弁の役割〉といったリハビリテーション看護の柱となる役割⁹⁾に加え、〈尊厳を保障したケアを実践する役割〉がみられた。エイジズムは対象理解のみならず、ケア提供の質へも影響する⁷⁾。この学生の反応から、今回の方略はエイジズムを払拭したケアを提供する基盤形成につながったと考えられた。

本研究の限界は、幾つかの教育的方略を連続して実施したため、どの教育技法が、どのように、どの程度効果があったかなどは明らかにできない。今後さらに研究をすすめたいと考えている。また、本研究データの1部は感想文を使用した。今後は教育効果をより明確に確認するためデータの取り方を検討したい。

結 論

学生の授業開始前の高齢者イメージは、〈機能・能力障害がある〉〈脆弱である〉〈汚い〉〈双方向に意味の通じたコミュニケーションをとることが難しい〉〈希望がなく孤立している〉などがみられた。授業終了後のイメージは9割が変わり、“少し変わった”では、〈イメージではなく高齢者の実際が分かった〉〈高齢者をより広い視点で理解できるようになった〉〈高齢者の本当の思いが分かった〉〈高齢者に強みがあることが分かった〉などがあり、“とても変わった”では《制度や援助のメリット・デメリットが分かった》《高齢者

や高齢者ケアをポジティブに捉えられるようになった》《高齢者の問題を身近に考えられるようになった》などがあった。高齢者リハビリテーションにおける看護師の役割では〈尊厳を保障したケアを実践する役割〉がみられた。これらの変化や効果は、省察からはじまったことが起点となり、自己の高齢者に対するエイジズムもしくは誤った捉えを意識し、看護師として改善に向けた方向へと意識を進め、各授業で具体的に高齢者の思いや生活の事実に触れ、“ありのまま”に受け取ることにより、学生の意識の中で反復しながら高齢者理解が作り変えられていったためと考えられた。

謝 辞

本研究に快く協力していただきました看護学生の皆様に心より感謝いたします。

文 献

- 1) 須田厚子, 榎本朋子: 看護学生の講義・演習・実習による高齢者イメージの変化, 川崎医療短期大学紀要, 26, 29-36, 2006
- 2) 相羽利昭, 山村江美子, 板倉勲子: 高齢者模擬体験による高齢者イメージと高齢者理解の変化, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 11, 119-126, 2003
- 3) 兎澤恵子, 古市清美, 高木タカ子: 看護大学生の連続学習による高齢者イメージ変化, 群馬パース大学紀要, 3, 381-387, 2006
- 4) 鯉坂由紀, 加藤真由美: 高齢者の口腔ケア演習方法の検討-模擬体験による患者理解と援助の気づき-, 第37回日本看護学会論文集-看護教育-, 288-290, 2007
- 5) 室屋和子, 佐藤一美, 出口由美, 他: 老人看護学における高齢者疑似体験による学び-対象理解と援助者の役割-, 産業医科大学雑誌, 26, 391-403, 2004
- 6) 原沢優子, 松岡広子, 星野純子, 他: 老年看護学における高齢者理解に向けた体験学習の効果と課題, 愛知県立看護大学紀要, 10, 41-48, 2004
- 7) Westmoreland GR, Counsell SR, Sennour Y, et al.: Improving medical student attitudes toward older patients: Through a "council of elders" and reflective writing experience, The American Geriatrics Society, 57, 315-320, 2009
- 8) 小山敦代, 石鍋圭子, リボウイツYS, 他: 「老年に関する映画」の教材化検討 14本の映画鑑賞とディスカッションを通して, 看護教育, 49, 428-433, 2008
- 9) Chin PA, Finocchiaro D, et al.: Rehabilitation Nursing Practice, McGRAW-HILL, New York, 1998
- 10) Strain JJ: Agism in the medical profession, Geriatrics. 36 (4), 158-165, 1981
- 11) Butler RN: Age-ism: Another form of bigotry, Gerontologist, 9, 243-246, 1969
- 12) Erdman BP: エイジズム 高齢者差別の実相と克服の展望, 鈴木研一訳, 明石書店, 東京, 2002
- 13) 市川和彦: エイジズムと虐待を考える, 総合ケア, 14 (3), 21-26, 2004
- 14) Koyano W, Inoue K, et al.: Negative misconception about aging in Japanese Adults, J Cross-Cultural Gerontol, 2, 131-137, 1987
- 15) Wolf R, Daichman L, Bennett G: Abuse of the elderly, World Health Organization: World report on violence and health, Krug EG, Dahlerg LD, Mercy JA ed., 125-145, 2002
- 16) 藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 他: 児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要因 "REPRINTS" 高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から, 日本公衆衛生学会雑誌, 9, 615-625, 2007
- 17) 厚生統計協会: 厚生指針 増刊 国民衛生の動向, 56 (9), 42, 2009
- 18) 伊藤豊美, 住垣千恵子, 後藤友美, 他: 老年看護学実習における看護学生の高齢者に対するイメージの変化, 国立看護大学校研究紀要, 9 (1), 37-42, 2010
- 19) 清水裕子: 看護学生の高齢者との対話問題と特徴, 老年看護学, 11 (2), 56-63, 2007